

ヨーロッパ共通参照枠におけるレベルB1について

A propos du niveau B1 selon *Le Cadre européen commun de référence*

太 治 和 子

Le niveau B1 selon le CECR correspond à la notion du « niveau seuil » ou « threshold level » en anglais : la capacité de se débrouiller dans toutes les situations de la vie quotidienne en utilisant la langue cible. Dans cet article, nous analyserons minutieusement ce que vise le niveau B1 et, en nous appuyant sur le fait que plusieurs étudiants de 2^e année y sont parvenus d'après les résultats du TCF en 2006, nous chercherons des plans efficaces pour les cours de FLE de 2^e année basés principalement sur l'acquisition du niveau A2 qui, en même temps, permettraient aux étudiants motivés d'atteindre le niveau B1. Ainsi, en suivant le programme d'études, plusieurs activités pourront y être intégrées comme l'utilisation de documents authentiques, d'émissions télévisées et de films enregistrés en plus du manuel. Il sera aussi important de donner des cours en langue cible, et en début de chaque leçon, de discuter en français sur des sujets familiers et récents, de se familiariser avec des lettres en observant leurs construction et articulations, etc.

1. はじめに

われわれは前号で¹⁾、ヨーロッパ共通参照枠²⁾の中で展開されるレベル設定について、特にA1とA2を中心に論じてきた。その際に、B1は「入り口の段階・敷居段階」(フランス語で *niveau seuil*、英語で *threshold level* とよばれる)と定義され、その前の段階としてAレベルが設定されていることを述べた。しかしながら、現実問題として、大学の初修第2外国語科目として想定される目標はA1もしくはA2レベルであることも指摘した。

ところで、2006年度に関西大学で実施されたTCFフランス語能力テスト³⁾のプレテストでは、筆者の担当する2年次クラスの中からもB1レベルに達している学生が数名出た。つまり、この「入り口の段階」を視野に入れた授業カリキュラム設定は決して不可能ではないことが明らかになった。こうした結果を踏まえて、本稿では、B1の掲げる具体的目標を詳細に分析した上で、Aレベルに主眼をおいた授業であってもB1レベル達成可能な授業活動の可能性を探ってみたい。

2. レベル設定

『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』⁴⁾によると、欧州評議会で1960年代から始まった言語教育活動の成果のひとつとして、1975年に*The Threshold Level*が発行された。これは、「言語学習者が適切なコミュニケーションを取れると言えるためには、少なくとも何ができれば良いか、という敷居(threshold)に当たるレベルを示したものだと言える」(p.36)。Trimはこの「敷居レベル」を次のように定義している。

capable de se débrouiller en voyage dans le pays de la langue cible, dans toutes les situations de la vie quotidienne et —surtout—de lier des relations avec autrui, en échangeant des informations et des idées.⁵⁾

すなわち、フランス語学習者がフランスを訪れた際になんとかフランス語で日常生活ができるようになることを目標とする。

したがって、この「敷居レベル」を「初心者レベル」と解釈してはならない。Van Ek と Trimは、「ほとんどいかなる地理的、文化的限界も超えて心の地平線を上げ、そして、もしもそう望むならば、実際に敷居(threshold)をまたいで戸口から外の世界に踏み出すことができる」レベルと定義している⁶⁾。「敷居レベル」はむしろ中級レベルに相当すると考えられる。このため、教師の間で初級レベル設定を求める声が起こった。こうした教育現場からの要請を受けて、1991年に「敷居段階」の前の段階、「以前学習したことのある初心者 faux débutant・サバイバル段階 niveau de survie」(= A2)と「全くの初心者 vrai débutant・発見段階 niveau découverte」(= A1)が設定され、2000年には、「敷居段階」の次の段階、「上級段階 niveau avancé」(= B2)と、さらに上級の二つの段階、「自立段階 niveau autonome」(= C1)と「マスター段階 maîtrise」(= C2)が設定された。こうした時代の流れを受けて、ヨーロッパ共通参照枠CECRの中で展開される6つのレベルをまとめると次のようになる⁷⁾。

レベルA 初級段階の言語使用者 (Utilisateur élémentaire)

A1 始めたばかりの・発見段階 (Introductif ou découverte)

A2 中間の・サバイバル段階 (Intermédiaire ou de survie)

レベルB 依存しない言語使用者 (Utilisateur indépendant)

B1 敷居段階 (Niveau seuil)

B2 上級・依存しない段階 (Avancé ou indépendant)

レベルC 熟練段階の言語使用者 (Utilisateur expérimenté)

C1 自立段階 (Autonome)

C2 マスター段階 (Maîtrise)

B1の「敷居段階」は、先述したとおり、最低限の知識を獲得した「自立可能な依存しない言語使用者」のレベルである。次のB2「上級・依存しない段階」(Avancé ou indépendant)は、フランスで高等教育を受けようとする外国人に求められる最低限のフランス語能力レベルである⁸⁾。学生の中に、フランスで大学教育を受けたいと希望するものがいれば、彼らの具体的学習目標はこのB2レベルになるだろう。ところで、B1レベルとB2レベルの間には大きな溝が存在するそうである⁹⁾が、実際に DELF・DALF 試験管理センターが発行するパンフレットによると¹⁰⁾、それぞれのレベルに達するまでのおよその学習目安時間は次のように記述されている。

A1 約80—100時間

A2 A1 + 約100—120時間

B1 A2 + 約150—180時間

B2 B1 + 約200—250時間

すなわち、レベルが上がれば上がるほど、次のレベルに到達するためにはさらに多くの時間が必要なのである。実際、ヨーロッパ共通参照枠CECRの中では、A2からB1に達する倍の時間がB1からB2に到達するためには必要であろうと予想されている。その理由は、

La cause en est l'indispensable élargissement de la gamme des activités, des aptitudes et des discours. Cet état de fait se reflète dans la présentation fréquente d'une échelle de niveaux sous la forme d'un diagramme qui ressemble à un cornet de glace¹¹⁾

上級レベルほど、習得しなければならない項目範囲は広がっていくからである。すなわち、アイスクリームのコーンのように、上に行くほど、学習量と到達目標が増すのである。B1レベルに達した学生が、次のレベルに到達するまでの想像以上に長い期間、学習意欲を失わないように教員は特別に配慮する必要があるかもしれない。また、フランスでは、2006年に、移民労働者の受け入れとフランス社会への編入対策としてA1の下位レベルに当たるA1-1レベルと、DILF (= diplôme initial de langue française) が作られた¹²⁾。日本の大学における1年次フランス語クラスの中に最初の短期間で到達可能な目標として導入されれば、学生の動機付けになるかもしれない。

それでは、中級B1レベル、すなわちフランス語学習者がフランスを訪れた際になんとかフ

ランス語で日常生活を送ることができる「敷居レベル」とは具体的に何をさすのであろうか。

まず、ヨーロッパ共通参照枠CECRから、B1に関する3つの言語能力共通レベル記述文を引用する（筆者による和訳引用）。

表1 言語能力レベル・全体的な尺度

明快でスタンダードな言語が使われ、仕事や学校やレジャーなどにおける身近な事柄が話題になっていれば、要点を理解できる。学習中の言語が話されている地域を旅行中に会う大半の状況において、何とか一人で切り抜けることができる。身近な話題や興味ある分野で、筋の通った簡単なスピーチをすることができる。出来事や経験、夢を語ることができ、希望や目標を描写でき、計画やアイデアの理由や説明を簡単に述べるすることができる。¹³⁾

表2 言語能力レベル・自己評価のための表

「理解する・聞く」

明快でスタンダードな言語が使われ、仕事や学校やレジャーなどに関する身近な話題が問題になっていれば、要点を理解できる。比較的ゆっくりはっきりと話されていて、最近起こったニュースや個人的・職業的に関心のある話題ならば、多くのラジオ・テレビ放送の要点を理解することができる。

「理解する・読む」

よく使われる言葉、あるいは仕事に関する言葉で基本的に書かれたテキストを理解できる。個人的な手紙で書かれる出来事や挨拶・願望の表現を理解できる。

「話す・会話に参加する」

その言語が話されている地域に旅行中に会うであろうほとんどの状況に対処することができる。身近な、個人的に興味のある、あるいは日常生活に関する（たとえば、家族、レジャー、仕事、旅行、最近のニュース）会話に事前の準備を経ることなく参加することができる。

「話す・続けて自分の意見を述べる」

経験や出来事、自分の夢や望みや目標を簡単に語るすることができる。自分の意見や計画の理由・説明を述べることができる。物語や、本・映画のあら筋を語り、自分の感想を述べることができる。

「書く」

身近な、あるいは個人的に関心のある話題について、簡単で筋の通ったテキストを書くことができる。経験や印象を述べるための個人的な手紙を書くことができる。¹⁴⁾

表3 言語能力レベル・話し言葉使用の特徴

「範囲」

家族、レジャー、関心のある事柄、仕事、旅行、最近のニュースなどの話題について、ためらったり回りくどい表現を用いることがあっても、うまく切り抜けるだけの言語手段と語彙力を持っている。

「正確さ」

あらかじめ予想される状況で、しばしば使われる一連の文構造と「文型」をほぼ正確に使用する。

「流暢さ」

特に自由な話題について比較的長い会話が続く時には、言いたい語や文を探すのに時間がかかったり、言い直したりすることが非常に頻繁にあったとしても、相手に理解してもらうことができる。

「相手とのやり取り」

身近で個人的関心のある話題なら、一対一の簡単な会話を始めたり、続けたり、終わらせたりすることができる。お互いに理解できているかどうかを確認するために、相手が言った内容の一部分を繰り返して言うことができる。

「首尾一貫性」

短くて簡単明瞭な一連の要素を（ばらばらの点としてではなく）つながりのある首尾一貫した線として述べることができる。¹⁵⁾

先に引用したフランス語能力テストTCFでは、レベル3（B1に相当）について、次のような説明がある¹⁶⁾。

レベル3 中級

300から399ポイント

フランス語を効果的にマスターしているが、限界がある。身近な分野であれば、明解で標準的な表現を理解できる。旅行における会話をこなし、自分に興味のあることを話すことができる。計画やアイデアに関して短い説明をすることもできる。

同じく、TCFから、「文法構造」のレベル3の記述を引用する（筆者による和訳引用）。

文法能力はまだ習得途中。しかしながら、言語基本構造はマスターしており、効果的にコミュニケーションをとることができる。

また、大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズの発行するパンフレット（2007年7月2日～10月1日版、p.6より引用）では、日本人向けフランス語講座のレベル分けを次のように

設定している。

| | |
|------|-----|
| 初級 | A 1 |
| 中級 1 | A 2 |
| 中級 2 | B 1 |
| 上級 1 | B 2 |
| 上級 2 | C 1 |
| 上級 3 | C 2 |

B 1 は、中級 2 と定義されており、その内容は次のように記述されている (p.6)。

仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、ポイントを理解できる。

フランス語が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。

身近で個人的にも関心のある話題について、単純な構成の、脈絡のあるテキストを作ることができる。

経験、出来事、夢、希望、将来の目標などを説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。

また、DELF・DALF 試験管理センターが発行する前述のパンフレット 5 ページには B 1 に関して次のような記述がある。

B 1 / レベル 3 Intermédiaire

フランス語を効果的にマスターしているが、限界がある。身近な分野の明快で標準的な表現であれば理解できる。旅行先で会話をこなし、自分に興味のあることを話すことが出来る。計画やアイデアに関して短く説明することも可能。

次章では B 1 レベルに求められる言語行為能力の主要点を分析し、このレベルに達するためには授業活動の中で何をどのように組み入れるべきかについて、いくつかの提案をしてみたい。

3. レベルB1に求められていることがらを獲得するための授業の試み

まず、ヨーロッパ共通参照枠CECR 3章の3.6では、B1タスクをこなすのに必要な機能・概念・文法・語彙の分析として次のような記述がある（CECR, p.32-33、筆者による和訳引用）。

外国旅行者のための「数居レベル」に相当する。特に2つの特徴をあげることができる。

1. やり取りを続け、さまざまな状況の中で自分がほしいと思うものを獲得する能力である。例：一般に、はっきりと発音されスタンダードな言語であれば、かなり長い議論の要点を追うことができる。友達同士の非公式なだけな議論で、意見を述べたり尋ねたりできる。相手に伝えたいと思う意見の要点を理解してもらうことができる。ほしいと思うことの要点を述べるための幅広い簡単な表現形式を柔軟に使いこなすことができる。会話や議論についていくことができるが、自分の望むことを正確に伝えようとする時には難しいこともある。特に長い発話の中で、単語や文法形式を探したり、言い直しをしたりすることがあっても、相手にとって十分理解可能である。

2. 日常生活の問題にたくみに対処する能力である。例：公共交通機関を利用中に予想外の状況に出会っても切り抜けることができる。旅行代理店で旅行を計画する際や旅行中に、よく出会うことがらに対処することができる。身近な話題について準備無しに会話に加わる。苦情を言う。話のやり取りの中では相手に非常に頼っている状態ではあるが、対談や相談の際に会話のイニシアティブをとる（例えば新しい話題を持ち出す）。相手の言ったことの説明を再度求めたり、さらに詳しく述べるように頼むことができる。

つまり、自然な会話のやり取りができ、日常生活を送るのに不自由しない程度の外国語能力を獲得することが目標となっている。

ヨーロッパ共通参照枠CECR第4章の4.4. Activités de communication langagière et stratégies「コミュニケーション言語行為とストラテジー」（p.48-）では、各レベルの細かな目標と指針が載せられている。全文を引用することは紙面の関係で不可能なので、4.4.1 Activités de production et stratégies「メッセージを発する行為と方略」（pp.48-54）と4.4.2 Activités de réception et stratégies「メッセージを受ける行為と方略」（pp.54-60）の要点をまとめてみたい。

はっきりと発音されたスタンダードなフランス語であることがまず前提になっており、細部にはこだわらず要点を理解し伝えることができればよい。相手が特別な努力を強いられることなく自然に理解できる程度のフランス語を操ることができるようになっていなければならない、あらかじめ準備していなくてもどうにか切り抜けることができる程度の語彙数・表現・文法の

力が定着していなければならない。

「話す」行為について、B1になって新しく求められていることは、思いつくままに話すのではなく、物事を相互に関連付け、全体として脈絡の通った話をするのできる能力である。自分の体験や夢や希望を語ることができ、その理由を説明でき、現実起こった出来事や想像上の出来事を語り、自分の読んだ本や見た映画のあら筋を順序だてて述べるのできる、物語を語ることもできる。特に、A段階では求められなかった、相手と議論する能力も身につけている。「書く」行為については、筋の通ったテキストを書くのできるようになっており、A段階ではできなかった短いエッセーや報告書を書くこともできるよなっている。

そのための方略として、正確な語が出てこなくても他の言葉で言い換えたり、「母国語の単語をフランス語風に発音したり綴ってみたり」*franciser un mot de sa langue maternelle* (p.54)、会話が途切れても自分のほうから話を再開するのできる。また、相手に自分のフランス語を直してもらうのできる、場合に応じてはこちらが会話の主導権を握ることもできるよなっている。

メッセージを受ける行為のひとつである「聞く」能力については、外国語学習者のために特別に用意された簡単なフランス語でなくても、聞き取れるよなっている。かなり長い話でも要点を理解するのできる。ただし、スタンダードなフランス語であり、明瞭に発音されていることが条件である。また、多数の人々に向けられた講演や発表を聴衆者の一人として理解するのできる。これは、A段階ではできなかったことである。また、ラジオやテレビの番組も、身近な話題であれば要点を聞き取ることができ。映画の筋も追うことができ。「読む」能力については、身の回りにあるテキスト（手紙・パンフレット・案内・お知らせ等）を理解でき。新聞記事についても身近な話題であればおおまかに理解でき。

そのための方略として、知らない単語の意味を文脈から推論するよなっている。

それでは、B1レベル到達を視野に入れた具体的な学習活動は何かを探してみたい。まず、対象はあくまでスタンダードなフランス語であることを念頭に置いておかなければならない。中級教科書の中にはくだけた口語フランス語や若者の間で使われる省略語などを多用するものも見られるが、標準的なフランス語を用いるよなに教員は心がけるべきである。しかしながら、学習者の理解のために不自然なほどゆっくり発音することや、くりかえしを多用することは徐々に減らしていく必要がある。明瞭な発音を保ちつつも、自然な速さのフランス語に親しむ機会を設けるべきである。このためには、授業にアシスタントやゲストを招いて、教員との間でのやりとりを聞かせる機会を設けたり、毎回、テレビニュースや映画の一部を見せたりして、徐々に速いスピードのフランス語に慣れてもらうことも一案であろう。その際、完全な内容理解を学生に要求するべきではない。この段階では、100パーセントの聞き取り力を身につけさせることよりも、フランス語の音の流れに慣れてもらい、少しずつ単語や熟語や決まり文

句を聞き分けられるようになることを目標とするべきである。繰り返しになるが、B1段階になって問われる言語能力のうち最も重要なものは、対話者が外国人に対する特別な配慮を取ってなくても、コミュニケーションを続けることのできる能力である。テレビや映画を見せる時間をとることは、最初はなかなか内容を正確に理解できないとしても、長期的視野に立てば、非常に学習効果を持つだろう。文化的なモチベーション付けとしてだけでなく、中級段階への準備活動として授業計画に積極的に取り入れていくことが望まれる。

また、同じ理由から、「本物の教材」textes authentiques、すなわち、フランスで生活すれば必ず身近に遭遇する（機械などの）使用説明書、案内、広告、ちらし、パンフレット、メニューなどを授業に取り入れることも、B1段階には重要な意味を持つ。その際には、辞書を用いずに内容を理解するように指示し、文脈から意味を推論する学生の能力を高めたい。実際にフランスに滞在する時に備えて、問題処理能力・一人で切り抜ける力を獲得するのに大いに役立つであろう。なんとすれば、B1の目標は前述したように「もしもそう望むならば、実際に敷居（threshold）をまたいで戸口から外の世界に踏み出すことができる」敷居段階にあたるからである。辞書を用いて全訳させることは、本来の授業目的からは逸脱する。学生に対しても、わからない語や表現があることに欲求不満を感じることを無いよう、「細部よりも全体を理解する授業であり、問題処理能力を高め、更なる理解力を養うため」と十分納得してもらい必要があるかもしれない。

また、B1になって獲得されなければならない能力のひとつとして、一般大衆に向けられたメッセージを「聴衆」の一人として受け取り、その内容を理解する能力がある。これは、テレビ番組を見る際にも要求される能力ではあるが、テレビの場合、映像が内容理解の助けとなる。「聴衆」として講演や発表などを理解する能力を発達させるためには、教員がフランス語を積極的に用いて授業を運営することが役に立つであろう。ここでもまた、学生が100パーセント完全に教師の指示や説明を理解する必要はない。「要点」を理解できれば良いのである。重要な項目で、学生の完全な理解を確かめる必要がある場合は、日本語での説明を補足すればよい。こうして1年間、教員のフランス語での指示に慣れ親しんだ学生は、フランス人を一般対象とするメッセージに対しても、要点を理解する素地はできているであろう。

「準備をせずに」会話に加わる能力は、授業の中で、あらかじめ話題を設定せずに自由に会話をする時間を設けることで身につく。その際には、辞書の使用を禁止することも必要であろう。わからない表現に出会った時には、フランス語で聞きなおしてみたり、自分の間違いを直してもらうために、「これで通じますか」とフランス語で尋ねてみたり、言いたいことを言うための語彙が出てこないときには、日本語や英語の単語を「フランス語風に言い換え」franciser（CECR, p.54）てみたりしながら、何とかやり取りが成立すれば授業目標は達成できたと教員が認識することである。正しいフランス語を身につけることを重視するあまり、会話中にも辞書を引くことを習慣付ければ、実際の社会の中で世界各国の人々とコミュニケーション

ンする能力を獲得することは難しくなるばかりであろう。

A段階では、葉書を読み、書くことが目標となっていたが、B1段階では、手紙が問題となってくる。葉書には無い決まり文句があり、また長文になることで、「つなぎの言葉」も習得する必要がでてくる。長文の手紙を書くことは無理でも、身近な話題の手紙を読むことは可能であろう。その際には、段落分けや導入表現に注意を向け、理由を述べたり、内容を発展させたり、話題を変えたりするための表現を習得するよう促したい。

これは、B1段階になって問われる「レポートを書く」能力にも共通することである。思いつくままに文章を羅列するのではなく、内容に一貫性を持たせることはB1の重要な学習目標である。事実を提示し、その理由を述べ、さらに内容を発展させ、話題を変えるためには、必ず「つなぎの言葉」が必要である。そのためには、筆記試験を行う際に、段落という概念を強調することが役立つであろう。多くの学生は、筆記試験の際、文法練習問題の答案のように、文章を思いつくままに羅列するだけである。文章相互の関係は全く無視されることもしばしばである。例えば、「週末にしたこと」を書かせると、

Je suis allé à Umeda.

J'ai fait du shopping.

J'ai mangé dans un restaurant.

J'ai vu un ami.

このような答案が大多数を占める。複合過去を正確に使うことができても、これでは、手紙やレポートを書くことにはつながらない。「メッセージを發し、相手に理解してもらうために脈絡のあるテキストを書く」という視点が欠けているからである。

前章でも触れたとおり、B1段階においては、まだ文法項目は習得中である。それでも、過去の出来事を語ったり、夢や希望を語ったり、理由を述べて説得を試みたりする能力はすでに獲得されるべきである。そのためには、「メッセージを發するために必要な表現」として文法項目を習得することが重要である。依頼の表現 *Je voudrais ...* は、条件法を学習する前に習得されねばならない。複合過去を学んだ際には、必要であれば、半過去も同時に取り上げる必要もあるだろう（たとえば、*J'étais ...*）。

A段階からB段階へとつながっていくような授業運営をいくつか提示したが、フランス語を母国語とする学生たちとのメール・手紙のやりとりや、短期フランス留学などが用意されると、学生にとってもさらに上のレベルを目指す強い動機付けになるであろう。フランス語を学ぶ目標は、「言いたいことを相手に伝え、相手のメッセージを理解し、コミュニケーションが取れるようになること」、そして、「フランスでなんとか生活できるようになること」であろう。それはとりもなおさず、B1レベルの目指す目標なのである。

4. 最後に

外国語科目「フランス語1・2・3・4」では、A1およびA2レベルが学習目標である。しかしながら、授業を運営するにあたっては、Aレベルが最終目標になるのではなく、次の「自立可能な」B1レベル達成をも長期的展望に入れて授業を組み立てていくべきである。

「フランス語5・6」（3年次配当）では、このB1レベルが具体的目標となるであろうが、2年次で習得度別クラスが導入されれば、「フランス語3・4」（2年次配当）からすでにB1レベルを目指した授業運営が可能になるかもしれない。また、ヨーロッパ共通参照枠CECRの考え方が導入されることにより、卒業後も、語学専門学校に通うことや独学を続けることで、あるいはフランス滞在や仕事上の必要に迫られて、フランス語学習を続ける可能性がある点も視野に入れた授業カリキュラムを組むことができるようになりつつある。これはとりもなおさず、ヨーロッパ共通参照枠CECRの提唱する「行動中心主義」につながっていく。外国語教育は生涯にわたるものであり、社会人として世界のさまざまな人たちと共に生きていくために必要なことだからなのである。

こうした長期的展望に立ったフランス語教育が、日本における外国語教育のさらなる発展に寄与していくことを望んでやまない。

注

- 1) 太治和子、「ヨーロッパ共通参照枠とフランス語教育—レベル設定・自己評価表・行動主義—」、『関西大学外国語教育フォーラム』第6号、関西大学外国語教育研究機構、2007、pp.53-68.
- 2) Conseil de l'Europe, *Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer*, Didier, 2001. CECRと略す。
- 3) TCFとはTest de connaissance du françaisの略で、フランス文部省公認の世界共通のテストであり、聞き取りテスト（30問）・文法テスト（20問）・読解テスト（30問）の結果から、ヨーロッパ共通参照枠で設定されている6レベルのうちどのレベルに到達しているかを診断する。
- 4) ヨーロッパ日本語教師会、『ヨーロッパにおける日本語教育と Common European Framework of Reference for Languages』、国際交流基金、2005.
- 5) TAGLIANTE, Ch., *L'évaluation et le Cadre européen commun*, CLE International, 2005, p.42から引用。
- 6) VAN EK, J.A. and J.L.M.TRIM, *Threshold Level 1990*, 米山朝二・松沢伸二訳『新しい英語教育への指針 中級学習者レベル<指導要領>』、大修館書店、1998、p.3.
- 7) CECR, p.25.
- 8) C1を取得するとフランスの大学の学部に入學する際に義務付けられているフランス語能力評価試験が免除される。
- 9) 第21回関西フランス語教育研究会（2007年3月30・31日、大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズにて開催）の分科会「Les certifications en français langue étrangère du Ministère français de l'Education: DELF, DALF et TCF」（MEGRE B. と ROCHARD J. - F.による発表）での報告による。
- 10) DELF・DALF試験管理センター、『DELF/DALF』、2005年、p.6-7.
- 11) CECR, p.20.

- 12) 移民でなくてもこの試験を受けることはできる。
- 13) CECR, p.25.
- 14) CECR, p.26.
- 15) CECR, p.28.
- 16) CIEP, *TCF, Grille de niveau et d'interprétation des notes*, 2004. なお、引用文の「明解」は原文通り。